2018年度　文学研究科　修士課程一般
日本語日本文学コース　追加問題

問題三に以下の問を追加する。

(1) 各自の関心がある研究領域において、
資料（データ）を取り扱ううえで留意すべきことがらを
具体的に述べよ。

(2)「日本語」受験者は①を、それ以外の受験生
は②の設問を選択して解答せよ。

①あなたと日本語との出会い、および日本語に関心
を持ち、日本語研究を志すようになった経緯を具体的
に述べよ。(600字程度)

②次のA～Fから三題を選び、解答せよ。解答の冒頭にその記号を明記すること。

二〇一八年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

【修士課程】　**専門科目**　日本語日本文学コース　※解答は別紙（縦書）

注意事項

1　問題冊子および解答用紙は、試験開始の合図があるまで開かないこと。

2　受験番号と氏名は、解答用紙1ページの所定の欄に記入すること。

3　問題は1～6ページである。左下隅にページが表示してある。

問題一は、共通問題である。解答用紙の最初に、入学後に先行する専門分野の選択肢が掲出してあるので、該当するものを○で囲むこと。

問題二は、共通問題である。三つの問いに解答していない場合、全体の得点はゼロとなる。

問題三は、選択問題である。日本語学、古典文学、近現代文学の三領域の中から、入学後に専攻する領域の問題を選択し、設問の指示に従って解答すること。

Ⅰ　日本語学領域　　2ページ
Ⅱ　古典文学領域　　2～3ページ
Ⅲ　近現代文学領域　　4～6ページ

4　解答用紙は五枚裏表。1～10ページである。問題との対応は次の通り。

問題一	Ⅰ日本語学領域	1ページ
問題二	Ⅱ古典文学領域	1ページ
問題三	Ⅲ近現代文学領域	3ページ
		5ページ

解答はすべて解答用紙の所定のページに記入すること。

設問の指示にしたがい、問いの番号や選択した記号を適宜明記すること。

二〇一八年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

【修士課程】　専門科目　日本語日本文学 コース　※解答は別紙（縦・横書）

問題一　［共通問題］

大学院修士課程においてあなたが研究しようとしているテーマや対象について、自らの構想している研究方法に触れながら、十行程度で、できるだけ具体的かつ簡潔に説明せよ。

問題二　［共通問題］

・次のＡＢＣ群各々三問の中から、それぞれ一問ずつを選択し、各問十行程度で解答せよ。
・一般外国語で「日本語」を受験するものは、ＡＢＣのいずれか一つの群の代わりとしてＧ群の問を選択できる。
・解答の冒頭には、それぞれ選択した問の記号（Ａ1など）を明記せよ。
・三つの群の問題の中、一つの群の問題でも無回答の場合問題二全体の得点は零となる。

【Ａ群】日本語学領域

Ａ1　日本語における敬語の分類について説明せよ。

Ａ2　日本語における漢字の受容という観点から漢字の「音」と「訓」について説明せよ

Ａ3　日本語における「言文一致」の背景と沿革について説明せよ。

【Ｂ群】古典文学領域

Ｂ1　近世の出版文化が日本古典文学に与えた影響と意義について、具体例を挙げて述べよ。

Ｂ2　日本古典文学と芸能の関係について、具体例を挙げて述べよ。

Ｂ3　日本古典文学作品の「現代語訳」と外国語への「翻訳」との相違について述べよ。

【Ｃ群】近現代文学領域

Ｃ1　日本近代文学において戦争はどのように描かれてきたか、具体例を挙げながら論評せよ。

Ｃ2　日本近代文学における戯曲作品の意義を、具体例を挙げながら論評せよ。

Ｃ3　日本近代文学は宗教とどのようにかかわってきたか、具体例を挙げて論評せよ。

【Ｇ群】一般外国語で「日本語」を受験する者のみ、右のＡＢＣ群の一つの群の代わりとして選択できる問題

Ｇ1　あなたの研究する「日本語学」または「日本文学」という学問分野について、自分なりに定義して説明せよ。

二〇一八年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

【修士課程】　専門科目 日本語日本文学 コース　※解答は別紙（縦・横書）

問題三　［選択問題］ⅠⅡⅢから一領域を選択解答せよ。

Ⅰ　日本語学領域

A　『日本大文典』と『日葡辞書』について知るところを述べよ。

B　本居宣長の日本語研究史上の業績について知るところを述べよ。

C　日本語音韻史と方言音声との関係について知るところを述べよ。

D　日本語の音象徴語（擬声語・擬態語）について知るところを述べよ。

E　日本語における文法化の現象について知るところを述べよ。

F　「イチゴとメロン」「イチゴやメロン」のような「と」「や」の違いについて、具体的な表現例を出しながら考えるところを述べよ。

Ⅱ　古典文学領域

（一）次に掲げる語群い～むの中から二つを選び、それぞれについて要領よく説明せよ［一題につき五行程度］。解答の冒頭には、選んだ記号とその語とを明記すること。

い　藝文類聚　　ろ　東歌　　は　田辺福麻呂　　に　古事記序文

ほ　大国主命　　へ　古今和歌集　　と　多武峯少将物語　　ち　和泉式部

り　源為憲　　ぬ　千載佳句　　る　讃岐典侍日記　　を　とりかへばや

わ　保元物語　　か　十訓抄　　よ　冷泉為相　　た　兼好

れ　井筒　　そ　三条西実隆　　つ　五山文学　　ね　俳諧の歌仙

な　和訓三体詩　　ら　柳亭種彦　　む　洒落本

（二）次のA～Hの中から一題を選び、論述せよ［二十行程度］。解答の冒頭に、その記号を明記すること。

A　『万葉集』における自然の現れ方

B　『古事記』と『日本書紀』を比較していえること

C　和歌集における部類と配列

D　『無名草子』における物語文学批評

E　絵巻物と物語の関連

F　井原西鶴と松尾芭蕉

G　読本史上における上田秋成の位置

H　日本古典文学と仏教

二〇一八年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

【修士課程】　専門科目 日本語日本文学　コース　※解答は別紙（縦・横書）

Ⅱ　古典文学領域（続き）

（三）次に掲げるア～キの中から一つ選び、本文の直後の（　）内の指示にしたがって解答せよ。

ア　淡海乃海夕浪千鳥汝鳴者情毛思努爾古所念

（右をすべて平仮名で書き下し、解釈せよ。）

イ　此鉤者淤煩鉤須々鉤貧鉤宇流鉤云而於後手賜

（右をすべて平仮名で書き下し、解釈せよ。）

ウ

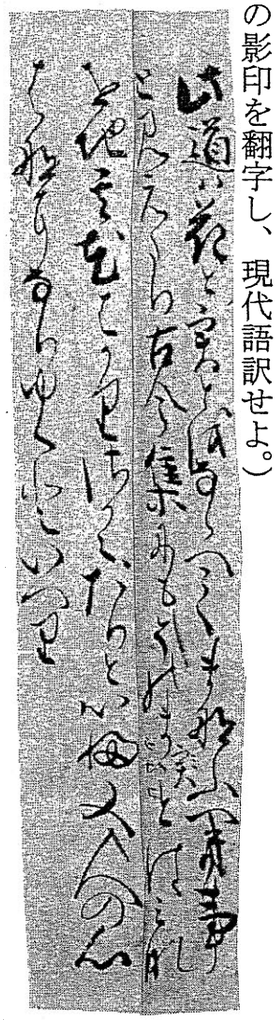
又

（右の影印の全文を翻字し、現代語訳せよ。）

エ

（右の影印を翻字し、現代語訳せよ。）

オ



（右の影印の全文を翻字し、濁点・句読点を補った上で、現代語訳せよ。）

カ

遠花浪玉露秋圓蕚丹霞只嘉
西風力不揺陶令家

（右の五言絶句の全体を楷書に直したうえで、一首全体の構成が分かるように、各句ごとに解釈せよ。）

キ

尋陽江頭夜送客楓葉荻花秋瑟瑟主人下馬
客在船舉酒欲飲無管絃

（右の影印の全文を翻字し、現代語訳せよ。）

二〇一八年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

【修士課程】　専門科目　日本語日本文学コース　※解答は別紙（縦・横書）

Ⅲ　近現代文学領域

（一）次のA群（1～2）、B群（1～3）の二つの群には、日本の近代文学の代表的な作品の一部が掲げられている。二つの群から、それぞれ一つを選び、①用語・文体・語りの方法など表現上の特色、②その作品の文学性や文学史的意味・文学者の生涯における位置、の両面から、自由に論ぜよ。（選んだ二つの作品の記号・番号を指定欄に記すこと。）

《A群》

A1　尾崎紅葉「金色夜叉」

宮は我を棄てたるよ。我は我妻を人に奪はれたるよ。我命にも換へて最愛みし人は芥の如く我を惡めるよ。恨は彼の骨に徹し、憤は彼の胸を劈きて、幾と身も世も忘れたる貫一は、あはれ奸婦の肉を啖ひて、此熱腸を冷さんとも思へり。忽ち彼は頭腦の裂けんとするを覺えて、苦痛に得堪へずして尻居に僵れたり。

宮は見るより驚く暇もあらず、諸共に砂に塗れて搔抱けば、閉ぢたる眼より亂落つる涙に浸れる灰色の頰を、月の光は悲しげに彷徨ひて、迫れる息は凄しく波打つ胸の響を傳ふ。宮は彼の背後より取縋り、抱緊め、撼動して、戰く聲を勵せば、勵す聲は更に戰きぬ。

「如何して、貫一さん、如何したのよう！」

貫一は力無げに宮の手を執れり。宮は涙に汚れたる男の顏をいと懇に拭ひたり。

「吁、宮さん恁して二人が一處に居るのも今夜限だ。お前が僕の介抱をしてくれるのも今夜限、僕がお前に物を言ふのも今夜限だよ。一月十七日、宮さん、善く覺えてお置き。來年の今月今夜は、貫一は何處で此月を見るのだか！　再來年の今月今夜……十年後の今月今夜……一生を通して僕は今月今夜を忘れん、忘れるものか、死んでも僕は忘れんよ！　可いか、宮さん、一月の十七日だ。來年の今月今夜になつたらば、僕の涙で必ず月は曇らして見せるから、月が……月が……月が……曇つたらば、宮さん、貫一は何處かでお前を恨んで、今夜のやうに泣いて居ると思つてくれ。」

宮は挫ぐばかりに貫一に取着きて、物狂しう咽入りぬ。

「那樣悲い事をいはずに、ねえ貫一さん、私も考へた事があるのだから、それは腹も立たうけれど、どうぞ堪忍して、少し辛抱してゐて下さいな。私はお肚の中には言ひたい事が澤山あるのだけれど、餘り言難い事ばかりだから、口へは出さないけれど、唯一言いひたいのは、私は貴方の事は忘れはしないわ――私は生涯忘れはしないわ。」

「聞きたくない！　忘れんくらゐなら何故見棄てた。」

「だから、私は決して見棄てはしないわ。」

「何、見棄てない？　見棄てないものが嫁に歸くかい、馬鹿な！二人の夫が有てるかい。」

「だから、私は考へてゐる事があるのだから、最少し辛抱して其を――私の心を見て下さいな。屹度貴方の事を忘れない證據を私は見せるわ。」

「えゝ、狼狽へて行らんことを言ふな、食ふに窮つて身を賣らなければならんのぢやなし、何を苦んで嫁に歸くのだ。内には七千圓も財産が在つて、お前は其處の一人娘ぢやないか、而して婿まで極つてゐるのぢやないか。其婿も四五年の後には學士になると、末の見込も着いてゐるのだ。而もお前は其婿を生涯忘れないほどに思つて居ると云ふぢやないか。それに何の不足が有つて、無理にも嫁に歸かなければならんのだ。天下に是くらゐ理の解らん話が有らうか。如何考へても、嫁に歸くべき必用の無いものが、無理に算段をして嫁に歸かうと爲るには、必ず何ぞ事情が無ければ成らない。

婿が不足なのか、金持と緣を組みたいのか、主意は決して此二件の外にはあるまい。言つて聞かしてくれ。遠慮は要らない。さあ、さあ、宮さん、遠慮することは無いよ。一旦夫に定めたものを振捨てるくらゐの無遠慮なものが、這麼事に遠慮も何も要るものか。」

「私が惡いのだから堪忍して下さい。」

「それぢや婿が不足なのだね。」

「貫一さん、それは餘りだわ、那樣に疑ふのなら、私は甚麼事でもして、而して證據を見せるわ。」

「婿に不足は無い？　それぢや富山は財があるからか、して見ると此結婚は慾からだね、僕の離緣も慾からだね。で、此結婚はお前も承知をしたのだね、えゝ？

A2　有島武郎「或る女」

新橋を渡る時、發車を知らせる二番目の鈴が、霧とまではいへない九月の朝の、煙つた空氣に包まれて聞こえて來た。葉子は平氣でそれを聞いたが、車夫は宙を飛んだ。而して車が、鶴屋といふ町の角の宿屋を曲つて、いつでも人馬の群がるあの共同井戸のあたりを駈けぬける時、停車場の入口の大戸を閉めようとする驛夫と爭ひながら、八分がた閉りかゝつた戸の所に突つ立つてこつちを見戍つてゐる青年の姿を見た。

「まあおそくなつて濟みませんでした事……まだ間に合ひますか知ら」

と葉子が云ひながら階段を昇ると、青年は粗末な麥稈帽子を一寸脱いで、默つたまゝ青い切符を渡した。

「おや何故一等になさらなかつたの。さうしないといけない譯があるから代へて下さいましな」

と云はうとしたけれども、火がつくばかりに驛夫がせき立てるので、葉子は默つたまゝ青年とならんで小刻みな足どりで、たつた一つだけ開いてゐる改札口へと急いだ。改札はこの二人の乘客を苦々しげに見やりながら、左手を延して待つてゐた。二人がてん〳〵に切符を出さうとする時、

「若奥樣、これをお忘れになりました」

と云ひながら、羽被の紺の香の高くするさつきの車夫が、薄い大柄なセルの膝掛を肩にかけたまゝ慌てたやうに追ひ駈けて來て、オリーヴ色の絹ハンケチに包んだ小さな物を渡さうとした。

「早く〳〵、早くしないと出つちまひますよ」改札が堪らなくなつて癇積聲をふり立てた。

青年の前で「若奥樣」と呼ばれたのと、改札ががみ〳〵怒鳴り立てたので、針のやうに鋭い神經はすぐ彼女をあまのじやくにした。葉子は今まで急ぎ氣味であつた歩みをぴつたり止めてしまつて、落ち付いた顏で、車夫の方に向きなほつた。

「さう御苦勞よ。家に歸つたらね、今日は歸りが遲くなるかも知れませんから、お孃さんたちだけで校友會にいらつしやいつてさう云つておくれ。それから横濱の近江屋――西洋小間物屋の近江屋が來たら、今日こつちから出かけたからつて云ふやうにつてね」

車夫はきよと〳〵と改札と葉子とをかたみがはりに見やりながら、自分が汽車にでも乘りおくれるやうに慌ててゐた。改札の顏は段々險しくなつて、あはや通路を閉めてしまはうとした時、葉子は

「どうも濟みませんでした事」

といつて切符をさし出しながら、改札の眼の先きで花が咲いたやうに微笑んで見せた。改札は馬鹿になつたやうな顏付をしながら、それでもおめ〳〵と切符に孔を入れた。

プラットフォームでは、驛員も見送人も、立つてゐる限りの人々は二人の方に眼を向けてゐた。それを全く氣付きもしないやうな物腰で、葉子は親しげに青年と肩を並べて、しづ〳〵と歩きながら、車夫の屆けた包物の中には何があるか中ててみろとか、横濱のやうに自分の心を牽く町はないとか、切符を一緒にしまつておいてくれろとか云つて、音樂者のやうにデリケートなその指先きで、わざとらしく幾度か青年の手に觸れる機會を求めた。列車の中からはある限りの顏が二人を見迎へ見送るので、青年が物慣れない處女のやうに羞かんで、而かも自分ながら自分を怒つてゐるのが葉子には面白く眺めやられた。

一番近い二等車の昇降口の所に立つてゐた車掌は右の手をポッケットに突つ込んで、靴の爪先きで待ち遠しさうに敷石を敲いてゐたが、葉子がデッキに足を踏み入れると、いきなり耳を劈くばかりに呼子を鳴らした。而して青年（青年は名を古藤といつた）が葉子に續いて飛び乘つた時には、機關車の應笛が前方で朝の町の賑やかなさゞめきを破つて響き渡つた。

二〇一八年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

【修士課程】　専門科目　日本語日本文学　コース　※解答は別紙（縦・横書）

《B群》

B1　谷崎潤一郎「卍」

先生、わたし今日はすつかり聞いてもらふつもりで伺ひましたのんですけど、折角お仕事中のとこかまひませんですやろか？　それはそれは委しいに申し上げますと實に長いのんで、ほんまにわたし、せめてもう少し自由に筆動きましたら、自分でこの事何から何まで書き留めて、小説のやうな風にまとめて、先生に見てもらはうか思たりしましたのんですが、……實はこなひだ中ひよつと書き出して見ましたのんですが、何しろ事件があんまりこんがらがつてゝ、どう云ふ風に何處から筆着けてえゝやら、とてもわたしなんぞには見當つけしません。そんでやつぱり先生にでも聞いてもらふより仕様ない思ひましてお邪魔に出ましたのんですけど、でも先生わたしのために大事な時間滅茶々々にしられておしまひになつて、えらい御迷惑でございますやろなあ。ほんまに宜しございますか？　わたし先生にはもう毎度々々おやさしいにしていたゞきますもんですから、つい御親切に甘える氣イになつて、御厄介にばつかりなりまして、どないに感謝してもしきれへんくらゐや思てます。そいであのう、いつかも大へん御心配かけましたあの人のこと、あれからお話せんならんのんですが、あれはあの後に申し上げました通り、あないに云うて下さいましたのんで、自分でもしみ〴〵考へまして、あんなりぶつつり絶交してしまひました。その當座は未練とでも云ひますのんか、何かにつけて思ひ出されますもんですから、家にいてましてもまるでヒステリーのやうになつてましたけど、そのうちにだん〳〵あの人がえゝことない男やつた云ふことはつきり分つて來まして、……主人も私が前は始終そは〳〵して音樂會や何や云うては出歩いてばつかりゐましたのんに、先生の御宅い寄せてもらふやうになりましてから、すつかり樣子變りまして、繪ェ畫いたり、ピアノの稽古したりして、一日家に落ち着いてますもんですから、「この頃はお前も女らしなつたなあ」なんぞ云ひまして、蔭ながら先生の御好意よろこんでました。尤もわたし、あの人の事に就いては何も主人に云ひませなんだ。「夫に過去のあやまち隠しとくのんよろしうないから、――殊に肉體上の關係なかつたのんなら告白し易い譯やから、すべてを打ち明けておしまひなさい」と先生は云うて下さいましたけど、……けどどうも、……それはまあ、主人にしましても或はうす〳〵氣イついてたかも分れしませんのですが、私の口からは何や云ひにくうもありましたし、此の後間違ひないやうに自分さい注意してたらえゝのや思ひまして、何事も胸に收めてたのんです。ですから主人は私が先生からどんなお話伺うて來ましたやら、それは知りませんでしたけど、いろ〳〵爲めになること教せてもろたに違ひない思て、さう云ふ心がけになつたのんはええ傾向や云うてましてん。

そんな譯で、そいから暫くは大人しいに家に引つ籠つてましたもんですから、此の樣子やつたらまあ安心や思ひましたもんか、さうさう己も遊んではゐられんから云うて、大阪の今橋ビルディングに事務所借つて辯護士開業しましたのんが、あれが昨年の二月頃でしたかしらん。――はあ、さうです。大學の方は獨法やりましたのんで、辯護士にならいつでもなれたのんです。始めは何でもプロフェツサアになりたいやうに云うてまして、ちやうど私のあの事件ありました時分には、引きつゞいて大學院の研究室の方い通てましたのんですが、辯護士やる氣イになりましたのんは別に此れちふ理由あつたのんではあれしません。さういつ迄も私の實家の方に世話にばつかりなつてましては義理も惡いし、私に對しても頭上らんと思うたのんですやろ。いつたい主人は大學時代に秀才や云ふ評判で、たいへんにえゝ成績で卒業しましたもんですから、さう云ふ人間ならば云ふのんで、嫁に來たとは云ふもんの、婿を取るのも同樣にして結婚したのんです。そいでもう私の親たちは主人を信用してまして、いくらか財産も分けてくれまして、まあ〳〵あせるには及ばんから、學者になりたかつたら學者になるで、ゆつくり勉強するがえゝ。洋行もしたければ夫婦で二三年彼方い行てくるがえゝなど云うてくれまして、――最初は主人も大そう喜んで、そんなつもりもあつたらしいのんですけど、――私があんまり我が儘やのんで、實家の方笠に着て威張るのんや云ふ風に取つて、それが癪に觸つたのかも分れしません。〈以下略〉

B2　井上ひさし「手鎖心中」

深川の永代寺で栄次郎の葬礼があった日、おれたちはそのまま帰る気にはなれず、永代寺門前の縄のれんで酒をのんだ。のんでいるうちに雨になった。雨の音を聞くともなく聞きながら、黙々と盃を口に運んだ。酒が廻るにつれて、太助がべそをかき、しきりに右手で目と鼻をひとつにこすりだした。

「わたしが馬鹿だったんです。清六にひとこと前もって知らせておけばこんなことにはならなかったんだ。それを……わたしは、知らせないほうがおもしろいからといって……わたしが馬鹿だった……」

「何回同じことをいっているのだ。太助」

清右衛門は酒が入ると意見上戸になる。

「おれは酒に酔ったからいうのではない。ないが、おまえも栄次郎もすこし調子に乗りすぎていたぞ。なにが茶気だ、なにが洒落だ。おれが口を酸っぱくしていっていたろう、笑いなど無用のものだと。無用のもので命を失う、こんなばかばかしいことがあるか。そして、おまえは一生栄次郎にすまぬと思いながらくよくよ暮さねばならない。とんだものを一生の道連れに背負込んだものだ。与七さん、あんたにもいいたいことがある。笑いなどというものは、無用でばかばかしいもので、その上、厄介千万なものさ。取扱いをひとつ間違えば、こんどのようなことにもなるし、なによりもあの京伝がいい手本ではないか。あの大才人がお咎めひとつで筆を折ったのだぞ。それを、あんたは、つてを求めてお上に、お咎めを逆に願い出たそうだが、全くどうかしている。お上のほんとうの恐しさを知らないから困る。お上の埒外のところで、ということは笑いも色も抜きで、すこしでも自分のやりたいことを見つけて行く、それしか、もの書きの道はないのだ。しょせん、戯作は慰みものではないかね。命を張るだけの値打があるかい？　読者はみんな寝っころがって暇つぶしに読んでいるだけだぜ。勧善懲悪、波瀾万丈、善玉悪玉、豪傑英雄……それで充分だ。うがち、茶気、笑い、滑稽、色里、女……そんなあぶないものは糞くらえだ。おれは安全第一で描きまくる。お上を気にせずにすむ方法でうんと描くぞ。うんと描かなきゃ筆一本じゃ、喰っていけぬ。清右衛門、もう下駄屋なぞやめて、筆で立て！」

清右衛門は結局自分自身に意見をはじめた。おれは笑い上戸だから、わけもなくにこにこして、安全第一結構じゃないか、と清右衛門にいった。ただし、おれは栄次郎の骨をひろってやる。栄次郎の倒れたところからやってみる。そうでもしなきゃ栄次郎が浮かばれないじゃないか。それに、おれには他に何の才もないのだ。武器は高々駄洒落がちょっと出来るぐらいのものだが、その唯一の武器で、栄次郎の分までやってやろうじゃないか。世人の慰みものに命を張ってみよう。栄次郎のとむらいの日に、おれは生れ変ったんだ。茶気が本気に勝てる道をさがしてやる。むろん、きっと机の前の地獄に坐り通してやる。おれはきょうから十返舎一九だ。

「なんだ、その十返舎一九というのは？」

「おれの新しい名前さ」

と、おれは清右衛門にいった。

「香道の黄熟香の十返に因んで十返舎だ」

「一九はなんだ？」

「おれの幼名が市九。だから十返舎一九だ」

「じゃ、おれは曲亭馬琴だ」

「……曲亭……馬琴？」

「漢書の〝巴陵曲亭の湯に楽しむ〟から曲亭、十訓抄の小野篁の〝才馬郷に非ずして、琴を弾くとも能はじ〟を取って、馬琴だ。前からこの号が気に入っていたのだ。難しくて、おまえさんにはわからんだろう」

太助は例の心憶え帳をひろげ、筆を走らせている。帳面を覗きこむと、大きな酔っぱらったような字で、

「意見上戸に笑い上戸、いつかさまざまの上戸のありのままを活写してみること。題はたとえば〝酩酊気質〟」「そうだ活写だ！　茶番や笑いはお咎めのもと、勧善懲悪は性に合わない。わたしの行く道は活写。絵草紙を読む人々の毎日の暮しを、髪床や風呂屋での人々の会話を、そして、浮世のすべてを活写すること！」

などと書いてある。

「おれは駄洒落とくすぐり、清右衛門は勧善懲悪、そして、太助は浮世の活写か。それもよかろう。こうなりゃ書き競べだぞ、太助」

「十返舎一九さん、わたしもたっていま名前をかえますよ」

太助は帳面を前にめくりながらいった。

「前に思いついて控えておいたんですが……あ、これです。太助は捨てて式亭三馬。めでたくいこうと思って式三番叟をもじりました」

外を見ると、雨はまだ闇の底からしっとりと降り続いている。

二〇一八年度　早稲田大学大学院文学研究科　入学試験問題

【修士課程】　専門科目　日本語日本文学　コース　※解答は別紙（縦・横書）

B3　井上光晴「明日」

かあさん、きつかよ。
やめたらいかん。赤ん坊のためばい。
もう嫌。
奥さん、あとひと息じゃけんね。もういっぺん。さ、おかあさんの手ば両手でしっかり握って。よかですか、今度こそ息を抜いちゃなりまっせんばい。
警報の鳴るなかを防空壕へ急ぐ人たちの足音。
今夜はまた、忙しかこと。いい加減飽きるばい。
命には替えられんでっしょ。
ふざけとるとじゃなかろうかね、アメリカの飛行機も。本気じゃなかとに、こっちだけが馬鹿のごと出たり入ったりして……。
母が私の体を半分起こして麦茶を飲ませてくれる。もうすぐ夜の明けるよ、と母はいった。暗かねえ。ああ、まだ暗か。そいでもそろそろ空の青うなってくるやろう。
私は自分自身の喚き声をきく。咽喉の内側がからからに渇いて貼りつく程に声をしぼりだしながら、別の場所にいる自分を見ている。私は腰を半分に折って土を掘り返していた。良人の靴下を繕い、風呂を沸かす。それらはみんな私の場所で、そこへ戻れば何もかも楽になるのに、そうすることができない。私の下半身は感覚を失っているようであった。体を裂く痛みが今はもう休みなしに私をしっかり捉えていて、何処にも逃げ場はない。声の限り喚いても終りはきそうにない。
時間が、私の周りにとぐろを巻いて黒々と居坐っている。厚いその包囲を突破して外へ出る力が私にはない。新しい夜明けなど私には信じられない。捉えられ、閉じ込められ、抑さえ込まれたまま老いの頂点まで追いやられるか、死の手に渡されるかだ。泣いていることが自分でわかる。こんなさなかにも涙はあたたかく、内ではなく外の風がひと筋、濡れた頬を撫でた。
うねりがきて、私はそこへ飛び込む。何かがいま、起ころうとしている。力だけでは足りず、私は喚声を上げる。薙ぎ倒される草、土くれの散乱、水の飛沫、立ちはだかる人々、そして赤い砂浜までのひと息の距離。
突然、終った。すべてが消えた。声にならない私の息は母の息と重なる。その時、鋭く空気を顫わせてひとつの叫びが湧いた。生まれたのだ。私はいま産み終えたのだ。はじめて耳にする声の何と美しいこと。声は力強く放たれ、それから次第に甘い響きに変って行く。
「よかった、ツル子」
母の手が私の腕を摑む。その手はとても熱い。
「お手柄ですばい」と、産婆さんがいう。「坊ちゃんですたい、どうですか」
「男ん子よ、ツル子。よかった。……」
歪んでくしゃくしゃになった母の顔に私は無言で頷き返す。何かいおうと思うが胸の中にわあっと沸きかえるものがあって、言葉がでない。
子供の泣き声。苦しんだことが嘘のように、紫と白の輝きが辺りに満ち始める。
母が立ち上がって雨戸を開けた。穏やかな空気が流れ込む中で、子供は力一杯泣き声をほとばしらせる。
「夜明けね、もう」
「ああ、明けたよ」母はいう。「今日もよか天気になるじゃろう。よか日和たい、ほんなこつ」
目を閉じるとそのまま眠りに引きずられそうだ。でも眠ってしまうのは惜しい。子供の声をずっときいていたい。遠くにいる良人の笑顔。おいはどっちでもよか。無事に生まれてくれれば女でも男でもうれしかたい。そいでも男やったら、ツル子に褒美をやらにゃいかんかな。おいに似とるぞ、きっと。褒美を貰いますけんね、あんた。ほら、この泣き声をきかせてあげたか。
母が体を熱い湯で拭いてくれた。腰から下が自分のものでないようにだるく、母の動かすのに任せてしばらく目を閉じている。
「四時十七分やったですよ」産婆さんはいう。
八月九日、四時十七分。私の子供がここにいる。ここに、私の横に、形あるものとしているということが信じられない。髪の毛、二つの耳、小さな目鼻とよく動く口を持ったこの子。私の子供は今日から生きる。産着の袖口から覗く握り拳がそう告げている。
ゆるやかな大気の動き。夜は終り、新しい夏の一日がいま幕を上げようとして、雀たちの囀りを促す。

（二）次の中から二題を選び、論評せよ（選んだ番号を、指定欄に記すこと）。

1、明治期の雑誌『文学界』または『明星』の果たした役割を、具体的に論評せよ（どちらかをとりあげても、両方をとりあげてもよい）。
2、「私小説」「心境小説」の用語や概念はどのようにして成立したか、解説せよ。
3、新聞というメディアと近現代文学とのかかわりを、具体的な事例をあげながら解説せよ。
4、ロシア文学と近現代文学とのかかわりを、具体的な事例をあげながら論評せよ。
5、作家の個人全集と文学研究とのかかわりについて、具体的な事例をあげながら論評せよ。
6、日本近代文学における「代作」について、具体的な事例をあげながら論評せよ。
7、「漱石山脈」について、複数の人名をあげながら解説せよ。
8、岩波文庫の刊行開始年を示し、この企画の特色を論評せよ。
9、日本近代文学における安寧秩序紊乱について、具体的な事例をあげながら論評せよ。
10、近現代文学にかかわる近年の新資料、または近年刊行された研究書のうち、あなたが重要と思うものを一つ（以上）とりあげ、なぜそう考えるか論評せよ。

受験番号	
氏名	

この欄以外に受験番号氏名を書かないこと。

日本語日本文学

総点

——ここから記入すること——

問題一

入学後に専攻する専門領域を○で囲め。古典文学領域については、〔　〕内の該当する時代等、ならびに散文・韻文にも○を付すこと。

日本語学

古典文学　〔上代・中古・中世・近世・和漢比較文学　／　散文・韻文〕

近現代文学

問題二

解答の冒頭には、それぞれ選択した問の記号（例　A1）を明記すること。

（裏へ続く）

——これより先の余白には絶対に記入しないこと——

（次頁〈続〉）

ここから記入すること

問題三　Ⅰ日本語学／Ⅱ古典文学　（選択した領域を○で囲め）

※問の番号や、選択した記号を適宜明記すること。

（裏へ続く）

——これより先の余白には絶対に記入しないこと——

ここから記入すること

問題三　Ⅲ近現代文学

（一）A（　　）

（裏へ続く）

(1) B (　)

——これより先の余白には絶対に記入しないこと——

ここから記入すること

(二)（　　）

（裏へ続く）

(11) (　　)

——これより先の余白には絶対に記入しないこと——